

肢体不自由者との接触経験と障害者イメージの関連

棚田 裕二*

新見公立短期大学地域福祉学科

(2015年11月18日受理)

本研究では、介護福祉士を目指す養成校の学生が肢体不自由者に対してどのようなイメージをもっているのか、また接触経験によってそのイメージに違いが生じるのかを明らかにすることを第一の目的としアンケート調査を行った。はじめに肢体不自由者のイメージ40項目の形容詞対の因子分析より5つの因子（障害による生活上の支障、障害者との距離感、障害者の性格行動特性、障害者の充実度、障害者の自立）を抽出した。次にその因子を接触経験により比較した結果、接触頻度の多い群は接触頻度の少ない群に比べて、肢体不自由者を身近に感じていた。このことから、障害者との接触頻度が心理的距離感の変容に関わる要因になると推測された。また、全ての因子において接触頻度の少ない群は多い群と比較してネガティブなイメージをもつことが推測された。接触頻度とともにボランティアや介護実習の体験内容によって障害者のイメージが変わる可能性が示唆された。

(キーワード) 肢体不自由, 学生, 障害者のイメージ, 接触経験

はじめに

平成26年度版障害者白書（内閣府）によると日本の障害者数は身体障害児・者が393.7万人（50.0%）で、次いで精神障害者が320.1万人（40.6%）、知的障害児・者が74.1万人（9.4%）であり、身体障害児・者が半数を占めている¹⁾。同じく平成26年度版障害者白書によると年齢階層別の在宅の身体障害者の内訳をみると、18歳未満7.3万人（1.9%）、18歳以上65歳未満111.1万人（28.8%）、65歳以上265.5万人（68.7%）であり、65歳以上の割合が昭和45年に行われた身体障害児・者実態調査（厚生労働省）の44.2万人から約6倍も増えている¹⁾。さらに平成18年身体障害児・者実態調査（厚生労働省）によると18歳以上の在宅の障害別にみた身体障害者数は肢体不自由が176.0万人（50.5%）で、次いで内部障害が107.0万人（30.7%）、聴覚・言語障害が34.3万人（9.8%）、視覚障害が31.0万人（8.9%）の順で肢体不自由のある障害者が約半数を占めている²⁾。このように高齢化に伴い肢体不自由者が増え、日常的に障害者と接する機会やメディア等で目にする機会も増えていることが推測される。この接触経験によって障害者に対するイメージが変わることを調査している先行研究も多い。河内³⁾によると大学生を対象に調査を行い、専攻科によって障害者に対する態度構造に違いがあるとした。例えば、経済学専攻の学生は人間の外部に興味を示しており、人間学専攻や児童学専攻の学生は人間の内部に興味を始めてしているとしている。

そこで本稿では、介護福祉士を目指す養成校の学生が肢体不自由者に対してどのようなイメージをもっているのか、また接触経験によってそのイメージに違いが生じるのかを明らかにすることを第一の目的とし、今後障害者を支援する学生に対する効果的な教育方法を見出すことを第二の目的として、調査を行った。

1 研究方法

1. 調査対象

A 短期大学介護福祉士養成学科（2年制課程）における1年次生52名（2014年度入学）を調査対象とした。

2. 調査時期

2014年10月27日

3. 調査方法

調査対象には自己記入式質問紙調査を行った。また、質問紙の配布および回収方法として、講義「障害の理解 A」において肢体不自由者の医学的側面および心理的影響の講義終了時に集合調査を実施した。質問紙の回収方法は講義終了後とし、各学生は指定した回収箱へ自ら投稿する形をとった。

質問内容は、性別、肢体不自由者との接触経験の有無、肢体不自由者に対するイメージ調査、自由記述とした。肢体不自由者の定義として、「障害の理解 A」の講義で「肢

*連絡先：棚田裕二 新見公立短期大学地域福祉学科 718-8585 新見市西方1263-2

体不自由とは、その原因にかかわらず、上肢や下肢あるいは、体幹（胸背部や腹部）の永続的な運動機能障害⁴⁾のある者とした。障害の原因として、「先天的なもの、事故や疾病などによる後天的なもの⁴⁾」があり、原因や状態像は多様な障害であること、脳性麻痺や脊髄損傷だけでなく、高齢者も含めた脳血管障害（麻痺等）も原因の一つであることを説明した。肢体不自由者との接触経験の有る群に対して、①友人、②家族、③その他近親者、④ボランティア、⑤介護実習、⑥施設見学として接触経験の内容を求め、⑦その他とし具体的な内容を記述できるようにして、接触経験の頻度を複数回答で確認した。肢体不自由者に対するイメージ調査は徳珍ら⁵⁾の身体障害者のイメージ調査を引用し、イメージ40項目の形容詞対からなる質問項目を作成した。対立した形容詞でポジティブなイメージを1とし、ネガティブなイメージを6

とした6件法で回答を求めた。質問項目は、「温厚な-攻撃的な」「我慢強い-諦めのよい」「身近な-かけ離れた」などの40項目である。

4. 分析方法

データ整理および単純集計には Microsoft Excel 2010を使用した。

本研究の目的の一つである介護福祉士を目指す養成校の学生が肢体不自由者に対してどのようなイメージを持っているのかを明らかにするため、肢体不自由者イメージの形容詞対40項目について、固有値を1.5以上としバリマックス回転を伴う主成分分析を行った。分析過程において、因子負荷量が.40未満のものを破棄しつつ^{注1)}分析を繰り返し、因子構造を確定した。尺度の信頼性については、Cronbachの α 係数（内的一貫性）で検証した。内

表1 肢体不自由者のイメージにおける因子分析の結果

	因子項目				
	第1因子 「生活上の支障」	第2因子 「距離感」	第3因子 「性格行動特性」	第4因子 「充実感」	第5因子 「自立」
簡単な_大変な	.817	.096	-.033	.142	.097
安易な_困難な	.745	.191	.096	.072	.140
便利な_不便な	.736	.392	-.172	.148	-.095
嬉しい_悲しい	.641	.180	.195	.351	.072
楽しい_怖い	.632	.025	.350	.383	.008
単純な_複雑な	.609	.078	.292	.178	.096
親しみやすい_親みにくい	.595	.238	.220	.171	-.294
分かる_分からない	.489	.364	.220	-.070	.023
早い_遅い	.444	.423	.069	.243	.288
近い_遠い	.223	.821	-.003	-.047	.112
身近な_かけ離れた	.160	.774	-.090	.337	.198
洗練された_素朴な	.264	.622	.281	-.053	.123
有利な_不利な	.403	.558	.042	.062	.066
大人っぽい_子供っぽい	-.165	.533	.418	.364	.196
社交的な_閉鎖的な	.279	.532	.180	.469	-.018
良い_悪い	.265	.481	.289	.279	-.216
自由な_不自由な	.423	.456	-.093	.454	.067
優しい_怖い	.167	.007	.739	.218	.056
穏やかな_激しい	.170	-.138	.696	.374	-.182
静かな_うるさい	-.020	.084	.653	-.198	.316
協調的な_自己中心的な	.501	.257	.648	-.133	.014
温厚な_攻撃的な	.088	.190	.639	.108	-.118
綺麗な_汚い	.097	-.068	.217	.805	.124
健康_不健康	.326	.319	-.045	.713	.244
満足な_不満な	.385	.272	.128	.661	.144
自立している_依存している	.282	.180	-.046	.111	.760
努力する_怠ける	.111	.014	-.154	.166	.719
我慢強い_諦めのよい	-.019	-.016	.336	.247	.688
大きい_小さい	-.210	.387	.077	-.133	.628

表中の数値は回転後の因子負荷量であり、網掛け部分は因子負荷量が0.4以上で各因子項目において肢体不自由者イメージ項目で関連性が高いものをまとめたものである

容的妥当性については、因子分析で抽出された因子の構造要素を検討し、各因子の平均得点をもとに学生における肢体不自由者との接触経験と障害者のイメージの関連を検討した。分析は全てSPSS社の統計ソフトPASW Statics18.0 J for Windowsを使用した。

5. 倫理的配慮

研究の趣旨を口頭および紙面で説明するとともに回答した内容は全て数値化を行い、個人が特定されないことを説明した。また回答は任意であり、成績に左右されないことを説明し同意を得た。

II 結果

1. 基本属性

研究対象者52名は全て20歳以下で18歳が21名（40.4%）、19歳が31名（59.6%）であった。性別は「男性」が16名（30.8%）で、「女性」が36名（69.2%）であった。

肢体不自由者との接触経験が「有る」と回答した学生は46名（88.5%）で、「無し」と回答した学生は6名（11.5%）であった。接触経験の有る群の内訳として、①友人が4名（7.7%）、②家族が1名（1.9%）、③その他近親者が6名（11.5%）、④ボランティアが10名（19.2%）、⑤介護実習が42名（80.8%）、⑥施設見学が8名（15.4%）であった。⑦その他として「アルバイト先での接客」と「障害者施設との交流会」の2名（3.8%）であった。

障害者との接触頻度として接触経験の有る群のうち、日常的に接触する頻度が多いと推測できる①友人と②家族、③その他近親者を「接触経験の多い群」とし、一時的で比較的接触する頻度が少ないと推測できる④ボランティアと⑤介護実習、⑥施設見学を「接触経験の少ない群」とした。接触経験は複数回答であったため、「接触経験の多い群」と「接触経験の少ない群」の両方の項目に「有る」と答えた学生は「接触経験の多い群」として集計した結果、「接触経験の多い群」は10名（19.2%）で、「接触経験の少ない群」は36名（69.2%）であった。

2. 肢体不自由者イメージの因子分析

形容詞対40項目についての因子分析の結果、5つの因子を抽出した（表1）。第5因子までの累積寄与率は62.84%である。

第1因子は9項目で構成され（Cronbachの α 係数： $\alpha = .882$ ）、「障害による生活上の支障（以下、「生活上の支障」とした）」と命名した（平均値 \pm SD= 3.97 ± 1.02 ）。第2因子は8項目で構成され（Cronbachの α 係数： $\alpha = .857$ ）、「障害者との距離感（以下、「距離感」）」と命名した（平均値 \pm SD= 3.64 ± 1.06 ）。第3因子は5項目で構成され（Cronbachの α 係数： $\alpha = .761$ ）、「障害者の性格行動

表2 接触頻度による肢体不自由者イメージの比較

項目	【接触経験多い群】 平均値 \pm 標準偏差	【接触経験少ない群】 平均値 \pm 標準偏差	【接触経験なし群】 平均値 \pm 標準偏差
生活上の支障	3.88 \pm 1.13	4.02 \pm 0.98	3.80 \pm 1.07
距離感	3.32 \pm 1.24	3.74 \pm 0.98	3.60 \pm 1.14
性格行動特性	2.94 \pm 1.04	3.22 \pm 0.85	2.90 \pm 0.93
充実感	3.24 \pm 1.06	3.60 \pm 0.91	3.50 \pm 0.99
自立	2.83 \pm 1.11	2.96 \pm 1.16	2.96 \pm 1.27

* $p < 0.05$

特性（以下、「性格行動特性」）」と命名した（平均値 \pm SD= 3.13 ± 0.91 ）。第4因子は3項目で構成され（Cronbachの α 係数： $\alpha = .824$ ）、「障害者の充実度（以下、「充実感」）」とした（平均値 \pm SD= 3.52 ± 0.95 ）。第5因子は4項目で構成され（Cronbachの α 係数： $\alpha = .738$ ）、「障害者の自立（以下、「自立」）」と命名した（平均値 \pm SD= 2.93 ± 1.16 ）。

3. 接触頻度による肢体不自由者イメージの比較

因子ごとの各項目の回答を合計した得点を項目数で割った平均値を算出し、肢体不自由者との接触頻度で比較しt検定を用い検討した（表2）。なお、対立した形容詞ではポジティブなイメージを1とし、ネガティブなイメージを6としている。

第1因子「生活上の支障」においては、「接触経験の多い群」の平均値 3.88 ± 1.13 、「接触経験の少ない群」の平均値 4.02 ± 0.98 、「接触経験なし群」の平均値 3.80 ± 1.07 で有意差はみられなかったが、「接触経験の少ない群」が最もネガティブなイメージをもち、次いで「接触経験の多い群」と「接触経験なし群」となった。第2因子「距離感」においては、「接触経験の多い群」の平均値 3.32 ± 1.24 、「接触経験の少ない群」の平均値 3.74 ± 0.98 、「接触経験なし群」の平均値 3.60 ± 1.14 で「接触経験の多い群」と「接触経験の少ない群」に有意差が認められた。「接触経験の少ない群」が最もネガティブなイメージをもち、次いで「接触経験なし群」と「接触経験の多い群」となった。第3因子「性格行動特性」においては、「接触経験の多い群」の平均値 2.94 ± 1.04 、「接触経験の少ない群」の平均値 3.22 ± 0.85 、「接触経験なし群」の平均値 2.90 ± 0.93 で有意差はみられなかったが、「接触経験の少ない群」が最もネガティブなイメージをもち、次いで「接触経験の多い群」と「接触経験なし群」であった。第4因子「充実感」においては、「接触経験の多い群」の平均値 3.24 ± 1.06 、「接触経験の少

ない群”の平均値 3.60 ± 0.91 ，“接触経験なし群”の平均値 3.50 ± 0.99 で有意差はみられなかったが，“接触経験の少ない群”が最もネガティブなイメージをもち、次いで“接触経験なし群”と“接触経験の多い群”であった。第5因子「自立」においては，“接触経験の多い群”の平均値 2.83 ± 1.11 ，“接触経験の少ない群”の平均値 2.96 ± 1.16 ，“接触経験なし群”の平均値 2.96 ± 1.27 で有意差はみられなかったが，“接触経験の少ない群”が最もネガティブなイメージをもち、次いで“接触経験なし群”と“接触経験の多い群”であった。以上結果として“接触経験の少ない群”が全ての因子項目において平均値が高くなっていった。“接触経験の多い群”と“接触経験なし群”を比較すると、「生活上の支障」と「性格行動特性」において前者の平均値が高く、「距離感」と「充実感」と「自立」において後者の平均値が高くなっていった。

4. 自由記述の結果

肢体不自由者に対して自由に意見を聞いた。結果、「(肢体不自由者は)生活をしていく中で不便なことが多い」や「障害があるからできないことも多い」などの生活場面でのネガティブなイメージや、「怖い」などの障害者に対するイメージをもつ学生がいた。しかし、「健常者と変わらない」や「(肢体不自由者も)自分のやりたいことがある」などのポジティブなイメージをもつ学生もいた。

III 考察

本研究では、介護福祉士を目指す養成校の学生を対象に肢体不自由者に対してどのようなイメージをもっているのか、また接触経験によってそのイメージに違いが生じるのかを明らかにすることを第一の目的としアンケートの分析を行った。その結果、52名のうち8割以上の46名の学生が肢体不自由者との接触経験があった。その接触経験のうち友人や家族などの近親者がいる“接触経験の多い群”とボランティアや介護実習など一時的な経験を“接触経験の少ない群”とした比較において、第2因子「距離感」のみに有意な差がみられた。このことから、障害者との接触頻度が心理的距離感の変容に関わる要因になると推測される。一方、その他の因子「生活上の支障」や「性格行動特性」、「充実感」、「自立」については有意な差がみられなかった。しかし、全ての因子において“接触経験の少ない群”は“接触経験の多い群”と比較してネガティブなイメージをもつことが推測された。その理由としてボランティアや介護実習での接触経験は一時的なものであり、直接障害者の生活を肌で感じたことで日常的に支援し続けていくことに対する負担感や不安感を感じたのではないかと推測できる。このことは第1因子「生活上の支障」で接触経験がない学生に比べて、接触頻

度の多い群の方がネガティブなイメージをもっていたことから考えられる。すなわち、接触頻度とともにボランティアや介護実習の体験内容によって障害者イメージが変わる可能性がある。以上のことより接触頻度の少ない学生に対しては接触経験の量と質の両方を高める必要がある。例えば実習後などのフォローや振り返りを行い、心理的距離を縮小させ障害者をより身近に感じるとともに、その障害に応じた支援を検討することで障害者イメージがポジティブ化すると考える。近親者に障害のある人がいる学生に対しては、徳珍らは「障害者の一番近くにいる家族に対する支援も、障害者支援の枠組みとして、認識させていく教育が必要」⁵⁾であるとし、講義の中で制度などでの支援内容が障害者やその家族の生活にどのように位置づけられ、具体的にイメージできるような教育が必要であると考える。

以上の考察をふまえると接触経験のない学生が最もネガティブなイメージをもつことが推測される。しかし、結果として「生活上の支障」と「性格行動特性」では最もポジティブなイメージをもち、その他の項目においても“接触経験の少ない群”よりポジティブなイメージをもっていた。河内³⁾は児童学を学ぶ学生とその他学科の学生において肢体不自由者(児)に対する態度構造の違いが生じるかを検討した結果、児童学を学ぶ学生の方が好意的な態度で障害者(児)を受け入れていた。その要因として「人間の内部に興味が向いている」ことをあげ、教育の中で培われた態度としている。本研究対象者の学生も介護福祉士の教育の中で肢体不自由者を好意的に受け入れ、肢体不自由者の生活上に支障が生じた際の対応方法やその他障害に対する接し方等を学んでいるため、このような差異が生じたと推測する。

本研究においてはボランティアや介護実習での経験内容は確認していない。そのため、“接触経験の多い群”“接触経験の少ない群”と“接触経験なし群”の間に差がみられなかった要因の一つであると考えられる。接触経験の先行研究^{6,7)}では実習前までは実習に対する不安をもっているが、体験を通して少しずつ不安が解消され、障害者に対してポジティブなイメージに変わった結果は本研究と異なる結果となった。都筑⁸⁾は施設実習が学生に与える影響は大きいと述べている。このようにボランティアや介護実習の体験・内容や頻度によって障害者へのイメージの変容にどのように作用するのかを明らかにすることを今後の課題の一つ目とする。また本調査対象者数が52名であり、調査結果を一般化するには、十分な数とはいえない。加えて“接触経験の多い群”“接触経験の少ない群”と“接触経験なし群”に偏りがある。この接触経験の偏りは本研究の対象者は介護福祉士を目指す

養成校の学生であり、何らかの接触経験をもつ学生が多くなったことを反映しており、結果に影響を与えている可能性も否定することはできない。しかし先行研究においては一般学生を対象とする研究が多く、この結果について十分に検討することができなかった。このことから継続的に研究することで研究対象者を増やすだけでなく、介護福祉士を目指す養成校の学生における肢体不自由者イメージに与える影響について追求することを今後の課題の二つ目とする。本研究結果において障害者との接触頻度および質によって障害者イメージがポジティブ化する可能性が示唆された。今後も継続して調査・研究を進め、障害者への理解が深まるように介護実習やボランティア体験、その他の効果的な教育内容を検討していきたい。

注

- 1) 破棄した肢体不自由者イメージの項目は「幸福な－不幸な」、「明るい－暗い」、「素直な－いじわるな」、「普通な－特別な」、「愉快的な－不愉快的な」、「繊細な－がさつな」、「積極的な－消極的な」、「同調的な－反発的な」、「関心のある－無関心な」、「純粋な－不純な」、「強い－弱い」の11項目である。

文献

- 1) 内閣府：障害者白書（平成26年度版），[On

line: <http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h26hakusho/zenbun/pdf/s3.pdf>, 2015年7月24日アクセス]

- 2) 厚生労働省：平成18年身体障害児・者実態調査，[On line: <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shintai/06/>, 2015年7月24日アクセス]
- 3) 河内清彦：肢体不自由者（児）に対する大学生の態度構造とその形成要因としての専攻学科および性別の役割について，特殊教育学研究，28(3)，25-35，1990.
- 4) 介護福祉士養成講座編集委員会：新・介護福祉士養成講座13 障害の理解 第4版，中央法規出版，82-89，2015.
- 5) 徳珍温子，藤田大輔：女子学生・生徒の「身体的」障害者イメージについての一考察，大阪信愛女学院短期大学紀要，39，9-20，2005.
- 6) 齋藤秀光，光永憲香，齊二美子：看護学生における精神障害者のイメージの変化について，東北大医保健学科紀要，16(2)，105-113，2007.
- 7) 河野理恵，鳩問亜紀子，渡邊浩文，加藤尚子：施設見学が福祉専攻大学生の心的状態に与える影響の検討－高齢者，障害者，子どもに対するイメージ，実習に対する不安，自己効力感に焦点をあてて－，目白大学総合科学研究，2，129-139，2006.
- 8) 都筑学：短期大学生における障害児者についてのイメージ－障害児者施設での実習経験による意識の変化－，大垣女子短期大学研究紀要，23，89-100，1986.

